

講評文

執筆者：野上 絹代

まず、この情勢の中、この大所帯で、一人も感染者を出さずに公演を打てたことは、それだけで「快挙」だと思っている。

作品について特筆したいのはマスク。学生が話し合っただけの決めた手段とはいえ、印象として強すぎるし、物語の設定とも違う。稽古では言葉の聞き取れなさや、誰が発言しているのか不明という問題も見てとれた。しかし、私が観劇した限り、舞台上でマスクがマイナスに働いてはいなかった。きっと、一生懸命練習し、お互い指摘しあって言葉の問題をみんなでクリアしたんだろうと想像する。また、マスクがあることによって、この物語は“現在”のメタファーなのであると解釈できた。つまり、コロナ禍に芸術を学ぶ自分たちができること・必要なものは芸術を通しての「出会い」「連帯」なのだというメッセージにとれた。他人と深く関わることは喜びをもたらす反面、怖くも苦しくもある。しかし震えながらも一歩を踏み出すんだという意志を私はとても美しいと感じた。4期生とは1年足らずしか関われなかったが、コロナ禍にならなければ考えもしなかったことを話し合い、本音を交換し、しっかりと他人と関わりながら創作する姿に大きな成長を感じた。

一方で、コロナというフィルターを通さなければやや全体的に二次元的で、距離を感じたのも事実である。「これは私の物語だ」と刺さりたかった、というのは一観客の欲張りな感想である。

ともあれ、今この瞬間、このメンバーでなければできないことをしっかりと発信したことに感銘を受けました。今後の糧にしていきたい。

大成功、おめでとうございます。